

動作訓練法初学者の継続的な実践に伴う困難に関する探索的研究

オルランド ヤコポ*

An Exploratory Study on Difficulties Associated with the Ongoing Practice of Dohsa-kunren-Hou for Beginners

Jacopo ORLANDO*

Semi-structured interview was conducted with Dohsa-kunren-hou beginners to gain an exploratory understanding of the difficulties associated with the ongoing practice of Dohsa-kunren-hou. The results indicated that beginners had difficulties in "setting up movement tasks", "becoming aware of the psychological issues of the helped person" and "supervision". In addition, it was considered that to provide regular opportunities for beginners to experience the Dohsa-kunren-hou for themselves would be effective in reducing difficulties.

key words: Dohsa-kunren-hou, beginners, difficulties

問題と目的

成瀬 (1985) は、脳性麻痺児の慢性化した不当な緊張を弛め、適切な動作を学習する支援として動作訓練法の有用性を論じた。それ以降、発達障害児や精神疾患患者に対する動作訓練法の適用に関する介入研究 (藤岡・成瀬, 1987; 鶴, 1988)、動作訓練法の心理的効果を検討する研究 (谷, 2007) が積み重ねられた。また、動作訓練法の実施者、とりわけ初学者に着目した研究もみられ (柳・森崎, 2003)、初学者は被援助者の状態把握や援助仮説に困難を示すと明らかにされた。上述した柳・森崎 (2003) は、動作訓練法の訓練会における初学者の困難を示したが、初学者の継続的な動作訓練法の実践に伴う困難は見出されていない。

そこで、本研究では動作訓練法の初学者に対するサポートの在り方を研究する一環として、初学者が継続的な動作訓練法の実践で抱く困難を探索的に検討する。

方法

調査対象者

Rønnestad, M. H., & Skovholt, T. M. (2003) が示した臨床家の職業発達段階モデルの「初学者期」に位置付く A 大学大学院で動作訓練法を導入した事例を担当する学生 4 名 (修士課程 1 名, 専門職学位課程 3 名) とした。

調査内容

「動作訓練法の実践で感じている困難はどのようなことか」を中心としたインタビューガイドを作成し、このガイドを基に約 30 分の半構造化面接を実施した。

分析方法

半構造化面接で得られた学生の動作訓練法の実践での困難に該当する語りを公認心理師の資格を有する計 3 名 (著者含む) で質的帰納的に分析し、カテゴリーを生成した。その際、対象者の語りを意味ある内容ごとに文章をセグメント化した後、共通の意味内容をコード化し、それらを集約する方法を選択した。また、著者含む 3 名で生成したカテゴリーの内的整合性を確認するために、本研究の問題・目的、研究方法、分析方法などの説明をした上で、分析協力が得られた臨床心理学を専攻する大学院生 4 名が質的帰納的に生成したカテゴリーとの一致率も検討した。その際、分析ソフトには SPSS を使用した。なお、分析過程で質的研究に精通している研究者のフィードバックを受けた。

手続き

調査は X 年 10 月に実施した。調査では、倫理的配慮を説明し、同意を得た上で、半構造化面接を実施した。

倫理的配慮

調査対象者への研究協力依頼は、直接面会する機会を設け、本研究の目的・方法、研究への参加は任意であること、不参加により不利益を受けないこと、研究途中の同意撤回が可能であること、得られたデータは本研究以外に使用しないこと、学会で結果を発表する際は個人が特定されないようにプライバシーを保護することなどを書面と口頭にて説明し、署名をもって同意を得たこととした。

結果

調査対象者に関して

本研究の対象者が受け持つ動作訓練法のケースの概要を Table 1 に示す。なお、全対象者が成人の脳性麻痺を対象としたケースを実施しており、動作課題も概ね同様の課題を実践していたため、対象者の特性は統制されていた。

初学者の困難や疑問に関して

半構造化面接で得られた動作訓練法の実践における困難に該当する語りを意味ある内容ごとに切片化した結果、19 のコードが抽出された。さらに、3つのカテゴリーが抽出された。カテゴリー名、代表的なコード、コード数を Table 2 に

* 神戸大学大学院
Graduate School of Kobe University, 3-11 Tsurukabuto,
Nada-ku, Kobe-shi, Hyougo, 657-8501, Japan.
(226d802d@stu.kobe-u.ac.jp)

Table 1 対象者の動作訓練法のケースの概要

対象者	担当トレーナー	頻度	実施回数	主な動作課題
A	成人の脳性麻痺者	月 1	4	仰臥位でのリラクゼーション課題, 坐位でのタテ系動作課題
B	成人の脳性麻痺者	月 1	5	躯幹の捻り, 背反らせ, 椅子坐位・立位でのタテ系動作課題
C	(1) 成人の脳性麻痺者	(1) 月 1	(1) 10	(1) 躯幹の捻り, 股関節の弛め
	(2) 成人の脳性麻痺者	(2) 隔週	(2) 8	(2) 躯幹の捻り, 股関節の弛め, 立位でのタテ系動作課題
D	成人の脳性麻痺者	隔週	8	躯幹の捻り, 脚の屈曲・伸展, 腕上げ課題

Table 2 動作訓練法初学者の困難

カテゴリー名	代表的なコード	コード数
動作課題の設定	「どういう目的で課題を選択すればいいかわからない」 「課題の意図・目的が分からない」	10
被援助者の心理的課題への気づき	「体の動きは見えるけど, 目の前でどう心が動いているのかわからない」 「課題を通した身体的な変化はあるけど, 心の動作ってなにか分からない」	3
スーパービジョン	「SVに行こうにも上手く言葉にできない」 「その場でのフィードバックじゃないと終わってからだと感覚を覚えてない」	6

示す。なお、著者含む3名と分析協力者4名の生成したカテゴリーの一致率は $\kappa=1.00$ であり、著者含む3名が生成したカテゴリーは内的整合性が高いと判断した。

考察

初学者は「動作課題の設定」や「被援助者の心理的課題への気づき」に関する困難を抱えていることが示された。柳・森崎(2003)は、動作訓練法の訓練会で初学者は見立てに関する困難を示すと明らかにしたが、継続的な実践でも初学者は見立てに関する困難を抱くと考えられる。なお、堀江・針塚(1995)は援助者が課題に応じた身体動作の体験を獲得していない場合、援助遂行に困難を抱くことを示した。本研究では、対象者の語りより、初学者はケースで実施した全ての課題に応じた身体動作の体験は獲得していないと推察される。そのため、初学者期では援助の基礎的知識・技術の習得を促すのみならず、事例担当中に初学者が動作訓練法を体験する機会を設けることが困難の軽減に有効であると考えられる。加えて、初学者は「スーパービジョン」に関する困難を抱えていることも示された。高松・針塚(1990)は、動作訓練法初学者のスーパービジョンは、スーパーバイザーとの情緒的関係が援助の成功感と呼応することを示し、スーパービジョンの重要性を唱えた。また、柳・森崎(2003)は初学者への指導において、適切な援助仮説に基づいたデモンストレーションを初学者に見せても、初学者がそれを実践に活かすことができるとは限らないと示した。そのため、スーパービジョンでは初学者に対する情緒的なサポートを基盤としつつ、初学者の現実的な条件の中で上述した動作訓練法の体験などを取り入れた情報的なサポートを提供することも重要で

あると考えられる。

今後は、対象者を増やし、初学者の困難を多面的に把握する必要がある。また、初学者の動作訓練法の体験が初学者の困難に与える影響を検証する必要もある。

引用文献

- 藤岡 孝志・成瀬 悟策(1987). 動作療法の治療過程について——神経症の事例を通して——九州大学教育学部紀要, 31 (2), 73-82.
- 堀江 幸治・針塚 進(1995). 動作学習における学習者の体験の違いが動作の評価と伝達に及ぼす影響について九州大学教育学部紀要, 40 (2), 47-58.
- 成瀬 悟策(1985). 動作訓練の理論 誠信書房.
- 柳 智盛・森崎 博志(2003). 動作法指導場面における訓練者の認知的プロセスに関する研究 治療教育研究, 23, 75-82.
- Rønnestad, M.H. & Skovholt, T.M. (2003). The journey of the counselor and therapist: Research findings and perspectives on professional development. *Journal of Career Development*, 30, 5-44.
- 谷 浩一(2007). 生活場面に及ぶ動作法の効果——日・タイの保護者に対するアンケート調査から——リハビリテーション心理学研究, 34 (1-2), 17-33.
- 鶴 光代(1988). 動作療法における障害への治療的アプローチ——分裂病者の動作療法——リハビリテーション心理学研究, 14, 53-61.
- 高松 薫・針塚 進(1990). 心理リハビリテーションキャンプにおけるスーパービジョン——セラピスト経験との関連——九州大学教育学部紀要, 35 (2), 51-61.